

はじめに

ゾンビ家制度。そんな言葉が生まれたのは、「共同テール」というグループの発起人会の席上でした。共同テールは、生存権や両性の平等、それらの扇の要としての「戦争をしない国」をうたった憲法を生かし、「いのちの安全保障確立に向けて非正規社会からの脱却を目指す」を理念として、2021年にさまざまな人たちが集まったネットワークです。ここで、第二次大戦前夜の今の状況に警鐘を鳴らす『新しい戦前にさせない』連続シンポが始まり、その第5回目として2023年8月に開かれたのが「軍拡と『ゾンビ家制度』の罨」でした。

戦争と言うと、外交問題や軍事などに目が行きがちですが、それは私たちの生活をもむしばんでいきます。岸田政権下で始まった「5年間で43兆円」という前代未聞の軍拡予算は、保育や介護、教育などの生活予算を圧迫し、家庭内でそれらが無償で支えてきた女性の負担を大きく膨らませつつあります。

戦前の国家予算では、軍事予算は驚くべき高い比率を占めていました。生活にかかわることの大半を「家庭の自助努力」とすることでこうした予算は成り立ち、家制度は、そうした「自

助努力」を一線で支えさせるべく女性たちを囲い込む、重要な装置でした。今回の軍拡予算の下で、こうした「家制度」に相当する女性への無償労働押し付けシステムが、形を変えて復活させられているのではないか。それは、新しい家制度ではないのか。そんな問題提起に、ほかのメンバーから、それは「新しい」などという前向きなものではなく、すでに死んでいるものが墓場から姿を変えて呼び戻された「ゾンビ」ではないか、という声が上がりました。

たしかに、少子高齢化による人手不足や産業構造の変化で、女性の労働力なしでは経済は成り立たなくなり、介護や保育などを担うとされてきた女性たちが、家庭の外に出て働くことが求められています。その結果、家庭内のケア労働要員も人手不足状態です。それなのに、これに対する公的支えが縮小されれば社会は成り立ちません。大幅な軍拡のために社会保障費を削減する政策は、とつくに墓場に入っているゾンビのようなものです。「ゾンビ家制度」という言葉はこうして生まれました。

シンポは、そんなゾンビ状況を、様々な分野の人々の報告を通じて浮き彫りにしました。生活からの軍拡批判を提案してきた発起人の白石孝を総合司会に、社会的経済的なゾンビ度については、経済と労働をジェンダー視点から報じてきたジャーナリストの竹信三恵子、法制度を利用した「ゾンビ家制度」による「戦争できる国」への社会意識づくりについては、子どもや家庭での人権問題に取り組んできた弁護士杉浦ひとみ、こうした事態を引き起こす異次元と

も言える軍拡の危うさについては、武器取引反対ネットワーク（NAJAT）代表の杉原浩司、軍拡による公的な支えのはく奪が、どのように貧困を激化させるかについては、貧困現場に立ち会い続けてきた作家の雨宮処凛、そして、戦前の「国策落語」の紹介を通じ、戦争が文化活動にまで影響を及ぼし日常生活に浸透していく恐ろしさを語ってくれた落語家の古今亭菊千代の5人によって、軍拡が家庭と社会保障とジェンダー平等を崩していくメカニズムが多角的に語られました。この本は、その5人の発言を大幅に加筆修正し、「ゾンビ家制度」の姿を描き出そうとしたものです。

こうした状況は、まだ終わっていません。2024年には民法改正によって「共同親権」が導入されました。「別れても父は父」というやさしいイメージの下で、合意がない場合でも「父の権利」の名の下に夫の暴力や支配が継続されるのではという不安が、DV被害者の女性たちを中心に広がっています。これも、新しい父権の強化という意味で「ゾンビ家制度」ではないか。そんな思いから同年8月、共同テールは前川喜平・元文部科学省次官らを招いて開催した第11回連続シンポで、このテーマも取り上げました。

戦争の被害は、開戦前から始まっています。そして、戦争は、やさしく明るい言葉でしのびよります。そうした日常の中の戦争と闘うために、この本を生かしていただきたいと私たちは願っています。

（二つのシンポジウムの提案者として、竹信三恵子、文中敬称略）